

I 10 卒中 O-026-3

フレイル、プレフレイル患者における脳卒中併存と予後

神澤 孝夫^{1,2}、狩野 悠²、八重樫 祐章²、清水 みどり²、
鈴木 大士郎⁴、山下 雄介⁴、美原 盤^{2,3}

1:公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 脳卒中部門、2:公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 認知症疾患医療センター、3:公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 神経内科、4:公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 薬剤部

【背景/目的】フレイルの前段階（プレフレイル）の高齢者には、フレイルに陥らないために各種疾患と関連したトータルケアを行いフレイルの予防をしていく意義は大きい。ことに要介護状態になる疾患に脳卒中が挙げられるが、フレイル、プレフレイル患者における脳卒中と予後はあきらかでない。【対象/方法】当院認知症疾患医療センターを平成 28 年 8 月から平成 29 年 9 月まで受診し、厚生労働省の作成するフレイル基本チェックリストを用い 247 例（平均年齢 76.9 歳± 8.9）を評価し、フレイル群、プレフレイル群、非該当患者群の背景、各々の転帰を調査した。【結果】各群の背景は、フレイル群（76 人 [30.1 %], 女性%：63.8%, 年齢：79.9 歳± 7.3, MMSE: 19.5 点± 5.4, フレイルスコア：19.5 点± 5.4）、プレフレイル群（81 人 [32.8 %], 51.3%, 76.9 ± 8.4, 22.1 ± 5.5, 5.3 ± 1.1）、非該当患者群（90 人 [36.4 %], 62.2%, 73.5 ± 8.4, 25.4 ± 3.8, 2.1 ± 1.0）であり、脳卒中を併存している割合はフレイル群で高く（22 人 [28.9 %]）、抗血栓療法施行率：15.8 %、生活習慣保有率：38.3 %）、プレフレイル群（8 人 [9.9 %], 13.6%, 53.1%）、非該当患者群（13 人 [13.3 %], 9.6%, 32.2%）であった。下線の如く、抗血栓療法施行率はフレイル群、生活習慣病保有率はプレフレイル群で高い。観察期間中（中央値:289 日, IQR:201-349）、心血管イベント 1 例（フレイル群）がみられた。死亡は、転倒による外傷、誤嚥性肺炎、原因不明、老衰がフレイル群 4 人に認められた。【結語】高齢者の脳卒中予防において、プレフレイルからフレイルの移行を防ぐため、プレフレイルのスクリーニングと生活習慣病への介入・管理が重要と思われる。フレイル患者において脳卒中は直接的な死因となっている症例はみられなかった。